

**特集** 民生委員児童委員の研修のあり方を考える  
～検討委員会の答申から～

トピックス

「新型コロナウイルス感染症に対する意識  
と活動に関する調査報告」…………… 5

インフォメーション

「秋の褒章・叙勲」…………… 7

本誌表紙の写真募集! …………… 7

おすすめ書籍「ブックレビュー」…………… 8

エッセイ:ひとをつなぐ

「②希望という名の花を咲かせよう」… 8



# 民生委員児童委員の研修のあり方を考える

〈検討委員会の答申から〉

民生委員児童委員のなり手不足が大きな問題になっています

道民児連では、なり手不足の一因と考えられる

「委員の早期退任」に対し、研修という手立てで、

その状況緩和を図ることを目的に

「民生委員児童委員の研修のあり方に関する検討委員会」を設置しました

本号では、検討委員会の協議経過などを通して

委員長をお務めいただいた鳥居一頼氏からの寄稿により

民生委員児童委員の研修のこれからを考えていきます。



答申書伝達の様子

(左：佐川徹道民児連会長、右：鳥居一頼委員長)

## 共に歩む道に改革の芽を育てよう

〈検討委員会をふりかえって〉

民生委員児童委員の研修のあり方に関する検討委員会 委員長 鳥居 一頼

躍動する委員会へと

導く人たち

令和2年8月12日、ホテルポールスター札幌に、7人の精鋭ら

回会議である。

ホーツク管内での実践と活動啓

氏が選出された。

が集まった。検討委員会の第1

鳥居が委員長を拝命し、副委員長には道民児連理事で長くオ

発並びに人材育成に尽力されてきた小清水町民児協会長馬淵一

氏は、地域福祉の実践では全国

レベルの評価を得て、全道でもその牽引役を担っている。福祉教育にも造詣が深く、地域福祉そのものが福祉教育の実践の場であるとの認識の下、市民と「福祉でまちづくり」に協働の汗を流す。

富良野市民児協会長松田尚美氏は、若くして会長に推挙され、会員を束ねながら「住民支え合いマップづくり」を活動の基軸に据えて、地域や町内会との連携強化を進めながら民児協の推進体制を強化し、人材の育成に精力的に当たっている。市民や会員に寄り添いながら共に歩むアクティブな会長である。

旭川市民児連事務局長佐藤史教氏は、市内単位民児協の振興を担う。道の中核都市としての福祉行政を基盤に、市社協職員として行政との関係調整に気配りしながら、事務局としての手腕を振るう。民児協事務局のあり方や研修の現状についても一言をもち地域福祉の推進者である。

福祉人材育成に取り組む（一社）ウェルビーデザイン理事長篠原辰二氏は、防災・災害支援に

関わる専門的な見識と地域福祉の推進に関わる理論と実践など豊富な知見をもって、道内はもとより全国各地から求められているスーパーバイザーである。また、道民児連が実施する各種調査についてその分析を担う。

「市町村民児協等基本調査」も委託され、研修に関わる一部データの活用は、実態の解明に道筋をつけて根拠に基づく提案に反映させていくのである。

道民児連からは、委員として常務理事菅蒲信也氏、運営担当に次長長谷川稔氏、主査馬川友和氏が当たり、研修事業の改革について協働して協議を重ねていくことになる。

### 改革の必然性と委員集団への期待

委員の顔ぶれから見ても、それぞれの見解を率直に交換し合うことで問題の本質に迫り、求められたミッションをクリアする力量を持った方々である。まさに熱い思いを語り合い、改革への道筋をつける実践と見識をもった委員集団である。

前提となる課題は2つ。一つは民生委員の成り手不足、二つに1期、2期の短いスパンでリタイアする人の数が多いことである。その解決の糸口として、道民児連の従来の研修のあり方そのものにメスを入れる。個々の事業の評価と見直しを踏まえた改善方策の検討と提案事項の整理、追加しなければならぬ新規事業の具体的な提案など、委員会に課せられた役割は重かった。

それを払拭するには、個々の意見を尊重する建設的な議論とそれらを束ねて方向性を示すことに尽きる。協議に向けた基本的なスタンスの理解と協力をお願いし、事務局共々真摯に会議に臨んでいった。

改革の兆候はすでに表れていた。前年度の専門研修の一部や二期目民生委員対象の研修（旭川、新任研修（道内11か所、3か所は中止）の中で、ワークショップの手法を用いて、参加者個々の意識啓発と活動へのモチベーションを高める学習をしたことによつて、研修後、その内容を9割以上が支持し肯定する評価を得て

いたのである。また、コロナ禍における地域の取り組みの現状を調査した分析データ、そして進行中であった「基本調査」など、これらの客観的データから得られた知見も勘案しながら進める方向性も確認され、万全を期して委員会が運営されていく。

### 熱い思いを吐露する

全道から選りすぐったパワフルな委員たちは、熱い議論を展開する。

しかし、コロナの感染拡大に歯止めがかからず、対面の会議は8月、9月、11月の3回となり、12月道の集中期間宣言により4回目は書面会議となった。

ただ、その3回で精力的に会議は動いていた。改革の骨格と具体的な内容が十分に検討されていたことは驚きでもあり、幸いでもあった。会議前後のフォローアップに、事務局が厚く対処したことの成果ともいえる。メールや資料の郵送など適時に遅滞なく丁寧に対応していく。委員は5か月もの間、改革のあり方を念頭に置きながら、

地域で職場で検討を続けていく。だから会議では、すぐにトピックアを入れて本題に迫る協議が展開された。理に叶った協議の積み上げとなった。

協議の始めに、民生委員を取り巻く問題の抽出を行った。個々の研修に終始し民児協の足腰の強化に直結しないことを受け、複数参加によつて研修内容の共有化の可能性を探る動きや、スキルアップ以前に地域で民生委員を孤立させない仕組み作りの遅れも指摘された。悩んでいる民生委員をいかにバックアップするのか、その態勢や機能の不備の問題と併せて、社会的地位や役割を地域に発信しているのかも問われた。2つの課題を解決するためには、民生委員を支援する仕組み作りは単位民児協だけの課題ではないことが徐々に明らかになっていった。特に民生委員同士のコミュニケーションをいかに図るかはコロナ禍における課題でもあるが、民児協の運営を支える重要な課題であることも確認されていく。さらに、これらの課題を踏まえながら、民生委員の研修だけではなく、運営に関わる事務局を担う人たちへの研修の必



規事業の  
構成新  
と講師陣  
修テーマ  
新しい研  
化の打破、  
マンネリ  
グラムの  
件、プロ  
対象の条  
方、参加

その人自身の育つ力を引き出すこ  
ともある。個々が福祉に対して  
向き合うことで、福祉力が高まっ  
てくるのは必然であり、研修事業  
の充実が個人の学びをより主体化  
すること、学び得たものを民児  
協が組織として共有し同時に福祉  
力として束ね返してゆく営みその  
ものである。その先にあるのは、  
地域住民の幸せであり、その人ら  
の創造でもある。求める先の笑顔  
に、人生の生きがいや喜びを感じ、

えられた検討委員会でもあった。  
た。民としてこれからも関わってい  
きたい。

終わりに、検討委員諸氏の真摯  
な参画に深く感謝するとともに、  
百年を超える民生委員制度と道民  
児連の新しい歴史を刻む取り組み  
に期待しながら、微力ながら一市  
民としてこれからも関わってい

要性に発展していく。  
会議は、焦点を外すことなく具  
体的な方策を提示するポジティブ  
な戦略を持った議論へと導かれて  
いく。それは、「民生委員児童委  
員協議会のあり方に関する検討委  
員会」の設置の必然性を示唆する  
のであった。  
また、最初の会議では、喫緊の  
問題としてコロナ禍でいかに活動  
を行うかについての指針「新北海  
道民生委員児童委員活動スタイル」  
の原案が提示され、加除訂正  
を行い、委員会として令和2年8  
月17日、道民児連佐川徹会長に答  
申した。現在もそのスタイルを踏  
襲しているが、全国に先駆けて作  
成され、全国からの問い合わせが

「人を育てる。人が育つ」  
仕組み作りを  
民生委員を取り巻く現状の課題  
から、研修に関すること、支える  
仕組みに関すること、地域や関係  
機関・団体との連携に関すること  
の整理を行った。その上で、道民  
児連研修事業の一つひとつについ  
て協議を行った。そこでは多くの  
改善点が提起された。運営のあり  
方、参加  
対象の条  
件、プロ  
グラムの  
マンネリ  
化の打破、  
マンネリ  
グラムの  
件、プロ  
対象の条  
方、参加

案など、どれ一つ取っても検討作  
業から逃れることはできなかった。  
特に民児協の活動が地域福祉の  
最前線であることから、研修を通  
して学び得た見識を持って、我が  
マチを見つめることで見えてくる  
様々な問題やその解決について、  
行政や団体に働きかける「意見具  
申のはたらき」を再確認した意味  
は大きい。なぜなら、研修とは民  
生委員としての見識を高めること  
によって、いままで気づかなかつ  
た事柄や暮らしの問題に対して向  
き合う態度を育てていくことに他  
ならない。

「人こそ宝」  
道民児連も単位民児協も  
令和3年1月22日、佐川徹会長  
に答申書を手渡し、委員会の重要  
な役目を果たした。これは、これ  
からの北海道の福祉を支える担い  
手となる民生委員児童委員へのラ  
ブレターでもある。厳しい生活を  
余儀なくされた方々に寄り添い励  
まし見守り支える存在として、そ  
の豊かな人間性がその地で育てら  
れ、地域の福祉力を培い高める人  
となつていくことを、つぶさに教

研修の見直しと共に第一線の現場  
で奮闘する方々への敬意と賞賛を  
決して忘れてはいけないことを再  
確認した。なおもその資質を高め  
ていくことで、社会福祉への正し  
い理解と使命感、活動への意欲を  
喚起する研鑽の道標を示すことこ  
そ、改革の第一歩となることを強  
く念じた。人は納得しなければ動  
かない。信頼の糸を結ばねば心通  
わない。その集大成としての「答  
申書」は、序章にしか過ぎない。  
具体的に実現するという決意を共  
有し、共に歩む道に改革の芽を見  
いだし「人こそ宝」のおもいを抱  
いて、福祉人材を育て愛しんでい  
ただければ幸いである。  
重要なのは、推進母体の道民児  
連の体制を強化すること、それ  
を支える単位民児協そのものの足  
腰を強化することが、答申の骨格  
として提起されたことに心を留め  
てほしい。

# 新型コロナウイルス感染症に対する意識と活動に関する調査報告

道民児連では、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、令和2年5月に単位民児協を対象とした活動実態調査（以下、「民児協調査」）を実施しました。定例会の開催、訪問・相談支援活動等、さまざまな活動に大きな影響を与えている実態が明らかとなり、その調査結果をもとに「新北海道民生委員児童委員活動スタイル」（以下、「新活動スタイル」）の作成に至った経過があります。しかし、民児協調査はあくまでも民児協の組織活動に焦点を当てたものであり、民生委員児童委員個人が、コロナ禍にあつて活動に対する不安、悩み、恐れを抱いているのかを数量的に明らかにすることができませんでした。

## 調査概要

### ○調査対象および調査方法

令和2年度民生委員児童委員専門研修に参加した民生委員児童委員、主任児童委員に対して、アンケートを配布し、回答を得た後回収する。

### ○調査時期

令和2年9月4日～10月8日

### ○回答者数

703人（内訳左表のとおり）

## 調査結果

### (1) 感染症予防対策の徹底について

管内	回答数
空知	0
石狩	132
後志	63
胆振	155
日高	26
渡島	131
檜山	28
上川	0
留萌	39
宗谷	0
オホーツク	105
十勝	0
釧路	0
根室	24
合計	703

#### 【補足】

回答数が0の管内は新型コロナウイルスの感染拡大を受け専門研修を中止したため調査ができなかった

意識や活動の状況を明らかにする  
ことで、全道的な情報共有ならびに今後の支援体制の構築、新活動スタイル改訂の基礎資料とすることを目的に本調査を実施しましたので、その結果の一部を報告します。

【表1：感染症予防対策の徹底】

感染症予防対策	回答数	比率
徹底している	357	50.8%
徹底しているに近い	325	46.2%
徹底していないに近い	13	1.8%
徹底していない	2	0.3%
無回答	6	0.9%
合計	703	-

### (2) 活動時の感染への不安について

#### ① 訪問活動

訪問活動時の感染への不安については、「感じる」、「感じるに近い」の合計が48・9%、「感じない」、「感じないに近い」の合計が46・3%となっており、二極化の傾向が見受けられます。自由記述

【表2：訪問活動時の感染への不安】

感染の不安	回答数	比率
感じる	133	18.9%
感じるに近い	211	30.0%
感じないに近い	228	32.4%
感じない	98	13.9%
無回答	33	4.7%
合計	703	-

回答によると、「来訪者でマスクをしないで来る人が多い」、「自分はマスクして行くが、本人（対象者はマスクをしていない」、「耳が遠い高齢者とは、かなり接近しなければ会話が成立しない」など、民生委員自らはマスクを着用し感染症予防に努めたとしても、対象となる住民が感染症予防をしていない事例があり、これらのことが不安要素となっているものと考えられます。

#### ② 相談・支援活動

相談・支援活動時の感染への不安については、「感じる」、「感じ

るに近い」の合計が47・8%、「感じない」、「感じないに近い」の合計が45・1%となっており、訪問活動と同様に、やや二極化の傾向が見受けられます。不安に感じる背景としては、やはり人と接触する活動であるため、対象者（住民）の感染症予防対策の徹底具合が影響しているものと考えられます。

【表3：相談・支援活動時の感染への不安】

感染の不安	回答数	比率
感じる	106	15.1%
感じるに近い	230	32.7%
感じないに近い	220	31.3%
感じない	97	13.8%
無回答	50	7.1%
合計	703	-

#### ③ その他の活動

（サロンやイベント）

イベントの実施等、その他の活動の感染への不安については、「感じる」、「感じるに近い」の合計が55・8%、「感じない」、「感じ

【表4：その他の活動時の感染への不安】

感染の不安	回答数	比率
感じる	161	22.9%
感じるに近い	231	32.9%
感じないに近い	172	24.5%
感じない	78	11.1%
無回答	61	8.7%
合計	703	-

背景には、感染症予防に努めることと問題なく定例会が開催できるという経験値と、特定多数の参加であることに起因していると推察します。逆を言えば、コロナ禍において実施経験がない活動については、未知の要素が多く、強い不安を感じる可能性があると考えられます。

【表5：定例会出席時の感染への不安】

感染の不安	回答数	比率
感じる	57	8.1%
感じるに近い	151	21.5%
感じないに近い	287	40.8%
感じない	180	25.6%
無回答	28	4.0%
合計	703	-

⑤ 研修会への参加

研修参加時の感染への不安については、「感じる」、「感じるに近い」の合計が38・8%、「感じない」、「感じないに近い」の合計が57・8%となっており、5つある設問の中で比較的不安を感じない活動となっています。この背景には、会議や研修実施に関する感染症予防のノウハウが蓄積されつつ

【表6：研修参加時の感染への不安】

感染の不安	回答数	比率
感じる	83	11.8%
感じるに近い	190	27.0%
感じないに近い	268	38.1%
感じない	138	19.6%
無回答	24	3.4%
合計	703	-

あることが挙げられます。定例会の出席と比較して不安に感じる回答が多い理由としては、参加規模が定例会と比べて多いことや、特定多数が参加することなどが考えられます。

(3) コロナ禍における活動上の課題

表7の回答項目は、先行調査である「新型コロナウイルス感染拡大による活動への影響に関する調査」の結果を参考に、各課題の数量を測定するために設定しました。結果、課題として挙げられた回答としては、「ス、研修等、知識を習得する機会の減少」が48・1%、「キ、見守りが必要な住民への対応ができない」が32・1%、「ク、学校や福祉施設等へ訪問したいが制

限されている」が29・7%、「ア、感染症に対する正確な情報が不足している」が23・9%、「ケ、自治会・町内会、学校などと情報共有や連携などに支障がある」が22・0%となっており、委員自身の資質向上、見守り活動、他機関・団体との連携などを課題として感じている傾向が明らかとなりました。

その中でも、「ア、感染症に対する正確な情報が不足している」との回答が23・9%であることに着目します。道内において、初の新型コロナウイルスの感染者が確認されたのが令和2年の1月下旬です。そこから、さまざまな行政施策が展開され、北海道においては、「新北海道スタイル」の普及

【表7：コロナ禍における活動上の課題】

活動上の課題	回答数	比率
ア.感染症に対する正確な情報が不足している	168	23.9%
イ.マスクや消毒液など感染症予防物資が不足している	54	7.7%
ウ.世帯訪問に対する地域住民の拒否反応が強い	71	10.1%
エ.自分の家族から活動に対する理解や協力が得られない	13	1.8%
オ.電話による安否確認で相手先に出てもらえない	34	4.8%
カ.電話による相談の対応が不慣れなため困惑している	64	9.1%
キ.見守りが必要な住民への対応ができない	226	32.1%
ク.学校や福祉施設等へ訪問したいが制限されている	209	29.7%
ケ.自治会・町内会、学校などと情報共有や連携などに支障がある	155	22.0%
コ.地域における感染者やその家族に対する過度な偏見や差別がある	36	5.1%
サ.単位民児協内で委員同士の情報共有や連携の不足が生じている	122	17.4%
シ.活動方法や留意事項などの申し合わせが不十分な状況にある	102	14.5%
ス.研修等、知識を習得する機会の減少	338	48.1%

に至っていますが、新型コロナウイルスに関する知識の上書きが必要」と提唱しています。現時点では感染症予防の考えうる措置を全て「新北海道スタイル」として掲げている状況にあります。感染リスクが高い行為が、徐々に判明してきています。それらは日々更新

④ 定例会への出席  
定例会出席時の感染への不安については、「感じる」、「感じるに近い」の合計が29・6%、「感じない」、「感じないに近い」の合計が66・4%となっており、5つある設問の中で最も不安を感じない活動となっています。この結果の

されることから、最新の情報を取得することが大切であり、このことは、民生委員として、一生活者として重要なことといえます。

(4) 活動上の不安・自由記述回答 ※一部紹介

① 感染症予防に関すること

○やはりコロナに感染する人が地域から一人も出さないという一人ひとりの意識と徹底した予防のための行動をすることをいかにして実践していくかが大切。

○PCR検査が充分に行き届いていないことから、自分も相手も感染しているかどうか分からないのが不安。

○こちらが十分な感染症予防対策を行っていても、地域住民の方々がどのように感じているかわからず、どのように接したらよいか迷う。

② 訪問活動・相談・支援等に関すること

○訪問すると、とても快く玄関の戸を開けてくれ、コロナ禍の前と変わらない態度で接してくれる住民が多い。しかし、十分時間を取って、お話を聞いたり面会することができないことを申し訳なく思う。

○電話での安否確認での安否確認を進めているが、ちょっとした変化に気づくためには、やはり対面の方が良い。

○マスクをしての訪問で、高齢者に

は聞きとりづらい面がある。

○無症状のまま、感染している場合がある現状に不安をおぼえる。

○高齢者は、電話だけでは不安を感じるので、できるだけ訪問し顔を合わせて話をするが、感染予防を考えると心配。

○訪問先または相談にくる高齢者の方は、ほとんど民生委員に対して無警戒なので、皆マスクをしてこない。多少心配がある。

③ 定例会に関する事

○定例会の場所の確保、現在は人数を分けて会議をしているが、役員（会長、副会長の負担が大きくなっている）で心配。

○定例会、役員会等では感染症予防を徹底しているが、戸別訪問では各委員での対応になる為把握できない。

○過度な反応で活動が中止しているが、定例会は無理をしてでも開催すべき。不安な方は欠席をしていただき、無理はしない。

○コロナ禍の中で、定例会や研修が減少しているため、新任委員さんを心配している。

④ 情報収集・共有・提供に関する事

○北海道の感染者の報道で地域別管内別を伝えてもらえたので状況が掴め、なお一層自粛に目配り、気配りに専念できたことが良かったと思う。

○コロナ禍であれば、自分と家族の感染が心配であり、動きがひるむ。周囲の感染情報に敏感になった。

○自治会活動の自粛により、見守り状況など情報共有が滞っている。

⑤ その他

○一番の感染者にはならないよう、差別・偏見はきつとあると思う。  
○町内会でも、コロナに対する不安や心配など考え方に差がある。

(5) 活動上の工夫・自由記述回答 ※一部紹介

① 訪問活動や安否確認に関する事

○訪問宅に心配をかけないように、玄関前で話をしている。  
○できるだけ、屋外で話をするようにしている。

○直接訪問は難しい時節にあるので、毎月手紙を作成し、お手紙訪問をしている。ただし、この活動は相手の状況確認が難しい。

○訪問しないで、遠くから様子を伺っている。

② 委員や地域との連携に関する事

○委員同士の書類の受け渡しなどは電話連絡のうえ、郵便受けを利用して行うようにしている。  
○委員同士の携帯電話やスマートフォンを活用している。

○三密にならぬように定例会等も工夫して行っている。

受章おめでとうございます

「令和2年度 秋の褒章・叙勲」

令和2年度、秋の褒章・叙勲で、受章された民生委員児童委員の方々をご紹介します。  
(敬称略)

● 秋の褒章叙勲受章者

褒章受章者

◇ 藍綬褒章

松田 安臣(帯広市 現)  
長沼 敏文(せたな町 現)  
松本 健(新冠町 元)

叙勲受章者

◇ 瑞宝双光章

石上 源應(小樽市 現) 磯邊 育子(函館市 現)  
小松 巖(紋別市 元) 能登谷 世津子(函館市 元)  
高橋 佳子(美唄市 元) 松川 武二(旭川市 元)  
太田 重雄(南幌町 現) 櫻井 加代子(釧路市 現)  
松田 政志(俱知安町 現) 川森 勝衛(岩見沢市 元)  
平倉 範子(上富良野町 現) 安達 舜(稚内市 元)  
野 昭憲(美幌町 元) 仲川 正純(士別市 元)  
関戸 和幸(滝川市 現)  
高藤 昌志(北広島市 元)  
黒田 鐵博(八雲町 元)  
山口 薫(岩内町 現)

本誌表紙の写真募集!

道民児連では、本誌の表紙を飾る「北海道の風景写真」を募集しています。写真のご提供をいただける方は、道民児連にご連絡ください。(担当:馬川)

● 電話 011-261-2180

永久保存版  
半藤一利の昭和史



文春ムック  
文藝春秋  
1,650円(税込)

■ 内容

今年1月12日に90歳で逝去した作家・昭和史研究家、半藤一利さんの追悼ムックが刊行されました。

昭和5年に生まれ、少年期に太平洋戦争を経験した氏は、東京大学文学部を卒業後、文藝春秋に入社。現在も続く同社の数々の看板書籍の編集長を歴任し、退職後は作家として活躍しました。

自らを「歴史探偵」と称し、とりわけ戦火に身を投じた昭和という時代の徹底した検証を通じて、平和の尊さをあぶり出し、訴え続けた氏。本書はムック本の平易さを備えながら、それでも氏の想いをひも解く入り口として、重要な価値を有しています。

「なぜ日露戦争に勝利した日本が、太平洋戦争で大敗を喫したのか」を主軸にして書かれた力作「なぜ明治は勝利し昭和は破れたのか」を筆頭に、平成生まれの学生らとの対話を

記録した「東大生が半藤さんに聞いた昭和の歴史」、そして氏自ら選び

解説した昭和を振り返る数々の写真など、収録された内容のすべてには、日本人が決して忘れてはならないと、とても大切なことが込められています。

特に東大生との対話は白眉。自らの体験を踏まえ、昭和という時代のエッセンスをわかりやすく語りかける氏と、鋭い質問を投げかける学生たち。対話を通じて、風化が懸念される昭和の傷跡が、世代を超えてしっかりとバトンタッチされる様子に、我が身も斯くあるべきと襟を正さずにはいられません。

高校の後輩だった人気作家の宮部みゆき氏はじめ、ジャーナリストの池上彰氏や東大大学院教授の加藤陽子氏らによる特別寄稿も読みごたえ十分。絶筆となった『歴史探偵 忘れりの記』と合わせて読みたい一冊。

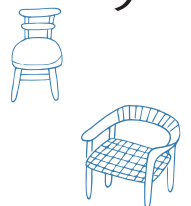
エッセイ



ひとき つながぐ

② 希望という名の花を咲かせよう

鳥居 一頼



他人のつながりが 断たれていった  
他人との距離が 離れていった  
他人とのこのころの距離も 遠のいていった  
だから希望という名の種を 植えた

他人と 力を合わせなければ  
世の中が良くなる  
希望という名の小さな蕾を  
心に汗して育てていこう

世の中の仕組みが 変わっていった  
世の中の暮らし方が 変わっていった  
世の中は もう昨日には戻れなかった  
でも希望という名の芽を 摘みではならなかった

あきらめず へこまず へたばらず  
涙も笑いも  
みんな暮らしの肥やしにすぎ込んで  
希望という名の花を 咲かせよう

いのちが 脅かされた  
暮らしが 立ちゆかなくなつた  
仕事を失い 進学も諦めさせた  
それでも希望という名の根は 踏まれて強くなる

きつといつか そうなると信じて  
したたかに しなやかに 生き抜いていこう  
希望という名のその花は  
一人ひとりのこのころに宿る いのちの花

他人と つながらなければ 生きていけない  
他人と 暮らしを立て直さなければ  
生きていけない

一人ひとりのこのころに飾る日は  
もうそこまで きつと来ている

【筆者紹介】

鳥居 一頼氏（とりのい かずよ）登別市出身。70歳。北海道教育大卒。道内で18年間教壇に立つ。道教委、道庁などに勤務後、室蘭・登別で小学校校長歴任。その後関西の私立大学の教授。現在、登別市きずな大使として地域福祉実践計画推進を支援する傍ら、各地で地域福祉アドバイザーとしても活動している。また、道民児連が設置した「民生委員児童委員の研修のあり方に関する検討委員会」の委員長をお務めいただいている。主な著書に「子どもと学ぶボランティア〜こっちゃんのボランティア授業論」（大阪ボランティア協会刊）、「福祉教育のキーワードと指導のポイント」（大阪ボランティア協会）、「子ども・共育・ボランティア」（長崎県ボランティア協会など）。